

病害虫発生予察情報（11月予報）

令和元年 10月 30日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均平年値)	予報の根拠
ウンシュウ ミカン	ミカンハダニ	発生量：少 (寄生株率 1.7%)	10月中旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（－）
トマト	葉かび病 すすかび病	発生量：多 (発病株率 14.5%)	10月中下旬発生量：多（＋） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（＋）
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：並 (発病株率 3.5%) コナジラミ類発生量：多 (寄生株率 6.0%)	10月中下旬発生量 黄化葉巻病：少（－） コナジラミ類：多（＋） 気象予報：気温：高い（＋）
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (寄生株率 0.2%)	10月中下旬発生量：少(発生なし)（－） フェロモントラップ誘殺数：やや少（－） 気象予報：気温：高い（＋）
ダイコン	黒斑細菌病	発生量：やや多 (発病株率 0.5%)	10月上中旬発生量：少(発生なし)（－） 台風による傷害：あり（＋） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（＋）
	白さび病	発生量：やや多 (発病株率 4.1%)	10月上中旬発生量：並(発生なし)（±） 気象予報：気温：高い（－） 降水量：多い（＋）
	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：やや少 (発病株率 0.8%) アブラムシ類発生量：多 (寄生株率 4.3%)	10月上中旬発生量 モザイク病：少(発生なし)（－） アブラムシ類：多（＋） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（－）
	コナガ	発生量：やや少 (寄生株率 0.3%)	10月上中旬発生量：少(発生なし)（－） フェロモントラップ誘殺数：並～少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（－）
	ナモグリバエ	発生量：多 (寄生株率 12.8%)	10月上中旬発生量：多（＋） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（－）

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均平年値)	予報の根拠
キャベツ	黒腐病	発生量：やや多 (発病株率4.2%)	10月中旬発生量：少(－) 台風による傷害：あり(＋) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：多い(＋)
	菌核病	発生量：やや多 (発病株率0.1%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：多い(＋)
	コナガ	発生量：並 (寄生株率0.1%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(－) 防除員からの情報：多(＋) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：多い(±)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (寄生株率0.1%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(－) フェロモントラップ誘殺数：やや少(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：多い(±)
	オオタバコガ	発生量：多 (寄生株率0.3%)	10月中旬発生量：やや多(＋) 防除員からの情報：多(＋) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：多い(±)
	アブラムシ類	発生量：少 (寄生株率0.7%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：多い(－)
ネギ (シロネギ)	さび病	発生量：多 (発病株率1.3%)	10月中旬発生量：やや多(＋) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：多い(＋)
	黒斑病・葉枯病	発生量：やや多 (発病株率2.8%)	10月中旬発生量：少(－) 9月の発生量：多(＋) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：多い(＋)
	シロイチモジ ヨトウ	発生量：並 (寄生株率0.4%)	10月中旬発生量：少(－) フェロモントラップ誘殺数：並～やや多(＋) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：多い(±)
	ネギアザミウマ	発生量：やや少 (寄生株率31.8%)	10月中旬発生量：少(－) 防除員からの情報：やや多(＋) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：多い(－)
	ネギハモグリ バエ	発生量：多 (被害株率12.8%)	10月中旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：多い(－)

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均平年値)	予報の根拠
レタス (非結球レタスを 除く)	斑点細菌病	発生量：多 (発病株率0.3%)	10月中旬発生量：並(発生なし)(±) 台風による傷害：あり(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+)
	べと病	発生量：やや多 (発病株率0.2%)	10月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：多い(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (寄生株率0.1%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) フェロモントラップ誘殺数：やや少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(±)
イチゴ	うどんこ病	発生量：多 (発病株率3.0%)	10月下旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+)
	炭疽病	発生量：多 (発病株率1.0%)	10月下旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+)
	アブラムシ類	発生量：多 (寄生株率3.1%)	10月下旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+)
	ハダニ類	発生量：やや少 (寄生株率15.4%)	10月下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (寄生株率0.4%)	10月下旬発生量：少(-) フェロモントラップ誘殺数：やや少(-) 気象予報：気温：高い(+)
作物全般	オオタバコガ	発生量：多	成虫誘殺数：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索!



静岡県農薬安全使用指針
・農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【ウンシュウミカン】

<生育の概況>

生育は平年並の地域が多いが、3～7日程度遅い地域もある。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は0.1%（平年1.6%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・発生がみられる場合には、収穫前日数に注意して薬剤防除を行う。

<その他の病害虫>

●青かび・緑かび病

- ・10月中旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は0.1個/樹（平年0.2個/樹）と平年より少なく、落果発病果数は0.5個/樹（平年0.5個/樹）と平年並であった。
- ・本病は果実の傷から病原菌が侵入するため、果実に傷がつかないように注意して収穫する。薬剤の選択にあたっては収穫前日数に注意して防除を行う。
- ・台風により生じた傷口から病原菌が感染し、樹上での発病が増加する可能性がある。

●褐色腐敗病

- ・10月中旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は0.0個/樹（平年値なし）、落果発病果数は1.6個/樹（平年値なし）であった。
- ・本病原菌は土壤中に生息しており、降雨による泥はね等により、樹上での発病が増加する可能性がある。

【カンキツ全般】

<その他の病害虫>

●かいよう病

- ・10月中旬の中晩柑の巡回調査では、果実の平均発病度は0.96（平年0.61）と平年よりやや多い発生であった。
- ・感染は11月以降起こらないが、冬期に夏秋梢の剪除、防風垣・防風ネットの整備を徹底し、翌春の新梢への感染拡大を防ぐ。特に、10月の台風で感染が拡大している可能性があるため注意する。

【チャ】

<その他の病害虫>

●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

- ・巡回調査時には、複数の茶園で両種の被害が認められた。また、予察灯及びフェロモントラップの調査では、10月の成虫発生量が平年よりも多くなっている。
- ・被害の認められる茶園では、翌年の一番茶の被害を防ぐために、秋整枝後に薬剤による防除を実施する。

●ナガチャコガネ

- ・幼虫は10月下旬～11月下旬にかけて、地表近くに上がってくる。うね間から雨落ち部を掘取り、幼虫が地表から20cmまでの深さに見られたら、薬剤の土壌かん注を実施する。

●チャトゲコナジラミ

- ・本種の発生は県内の多くの茶園に広がっており、巡回調査茶園すべてで幼虫の寄生が確認された。また一部にはすす病の発生が見られるような多発生茶園もあった。
- ・発生が確認されている茶園では、秋冬期に越冬幼虫を防除すると、来年の一番茶時期の成虫発生を少なくすることができる。
- ・防除は、チャトゲコナジラミに登録のあるマシン油乳剤を用いて来年1～2月に2回行うと効果的であるが、赤焼病の発生が懸念されるほ場では、年内に1回のみ防除を行う。その際、赤焼病の防除薬剤を先に散布し、1週間程度のちにマシン油乳剤を散布する。防除は幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くように散布する。また防除前に裾刈を行うと薬剤が茶株内部まで届き、防除効果が高まる。

●赤焼病

- ・本病は、通常春先より発生が始まり夏前に収束するが、台風が襲来した場合は、夏・秋でも通過1週間～10日後から発病し、翌春の伝染源となることがある。このため、台風襲来時は、通過後2週間目くらいまで数回は茶園を観察し、発生が見られた場合は殺菌剤を散布することで病原菌密度を下げておく。特に、「つゆひかり」「おくひかり」は本病に感受性が高い（＝本病に弱い）ので注意する。

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並である。

●葉かび病、すすかび病

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は21.5%（平年13.0%）と平年より多い発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好む）。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が悪いため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取って、ほ場外に撤去する。
- ・本県では、定植後から11月頃まではすすかび病が多く、次第に葉かび病が優占する傾向が見られる。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.3%（平年2.8%）と平年より少なかった。
- ・コナジラミ類の平均寄生株率は、19.0%（平年6.9%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、本病の媒介虫であるタバココナジラミの発生を助長する。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・タバココナジラミに対して以下の防除を徹底する。
施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
新芽への成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率0.5%）。
- ・フェロモントラップの誘殺数は、平年よりやや少なく推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年、11月中は成虫が発生するため、施設開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。
- ・本種は中齢以降では薬剤の効果が悪いため、ほ場内での発生に注意し、若齢幼虫の防除に努める。

【ダイコン】

<生育の概況>

生育は平年並～やや早い状況である。

●黒斑細菌病

予報の根拠

- ・10月上中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（本病の発病適温は25～30℃、降雨は本病の発生を助長する）。
- ・例年、生育後半になると発生が増加するが、今年は台風19号の影響により傷が生じている株が多かった。
そのため、例年より早い時期から病原細菌が感染し、発生が増大する可能性がある。

防除対策

- ・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に防除を行う。
- ・降雨が続くときや初発生を確認した場合、速やかに薬剤防除を実施する。
- ・生育の衰えは本病の発生を助長するため、肥料切れと排水に注意し、適切な管理に努める。
- ・葉柄基部から侵入した場合は、根部に影響を与え商品価値を落とすこともあるため特に注意する。

●白さび病

予報の根拠

- ・10月上中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本病の発生をやや助長する（本病は分生子の発芽最適温度が10℃と比較的低温を好む。また多雨により発生が助長される）。

防除対策

- ・白さび病が多発するとワッカ症を併発することがある。ワッカ症を防ぐには、葉での発病が少ないうちに薬剤散布を行う必要がある。
- ・発病残渣は翌年の伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●モザイク病（アブラムシ類）

予報の根拠

- ・10月上中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年0.1%）。
- ・本病の媒介虫であるアブラムシ類は、平均寄生株率0.3%（平年0.1%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、アブラムシ類の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する

●コナガ

予報の根拠

- ・10月上中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率0.1%）。
- ・浜松市および牧之原市のフェロモントラップによる誘殺数は、平年並〜少なく推移している。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、コナガの発生をやや助長する。

防除対策

- ・ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・10月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は7.9%（平年5.9%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、ナモグリバエの発生を特には助長しない。

防除対策

- ・葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。

【キャベツ】

<生育の概況>

台風の影響により、生育は平年より遅い地域が認められる。

●黒腐病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.6%（平年発病株率2.4%）と少なかった。ただし、台風19号が調査4日前の12日に通過している。台風により感染・発病が促進された場合、発病は台風通過10日～2週間後の10月下旬に始まる可能性が高い。
- ・1か月予報では、気温は平年よりも高く、降水量は平年より多いため、発生を助長する。

防除対策

- ・本病は細菌病で、発病後防除を実施しても進展が止まりにくいことから、予防散布に努める。特に強風雨の前後に薬剤散布を実施すると防除効果が高い。
- ・被害残さは感染源となるため、ほ場で土中に埋めるなどして適切に処分する。

●菌核病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年0.02%）。本病は例年生育後半に被害が増加する（12月の平年発病株率0.1%）。
- ・本病は、降雨があり、20℃前後の気温が続くと発生しやすい。1か月予報では、平年より気温が高く降水量も多いため、本病の発生は助長される。

防除対策

- ・例年発病がみられるほ場では予防的に薬剤防除を行うとともに、被害茎葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場で土中深く（地下50cm以上）に埋める等して適切に処分する。黒腐病と異なり、浅く埋めただけでは病原菌は死滅しない。

●コナガ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均寄生株率0.1%）。ただし、防除員からは、平年に比べ発生が多い報告があった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・結球前の新芽が加害されると芯止まりや品質の低下を招くので、結球前に防除を行う。
- ・薬剤に対する抵抗性が発達しやすいため、同系統剤の連用を避けローテーション散布を心がける。特にピレスロイド系およびジアミド系殺虫剤は薬剤感受性が低下している可能性があるため薬剤の選定には十分注意する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、本種と思われる被害葉は認められたものの、発生は認められなかった（年平均寄生株率0.4%）。
- ・フェロモントラップによる成虫誘殺数は平年に比べやや少なく推移している。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・発生が見られたほ場では、薬剤の効果が高い若齢幼虫のうちに防除する。若齢幼虫は葉裏を加害するため、葉裏にも十分薬液がかかるように散布する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率1.0%（平年0.4%）と平年よりもやや多かった。また、防除員からは、平年に比べ発生が多い報告があった。
- ・その他、【作物全般】のオオタバコガの項を参照。

防除対策

- ・幼虫が結球部を加害するため、結球内に侵入後では薬剤の効果が上がりにくい。例年、発生が見られるほ場では、早めに定期的な防除を行なう。
- ・薬剤に対する抵抗性の発達を防ぐために、同一系統の薬剤を連用しないようにする。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均寄生株率0.8%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・本虫は風通しの悪い場所に多く発生することから、例年発生が認められるほ場では発生に注意し、早期に薬剤防除を実施する。
- ・下葉の葉裏に寄生が多いので、寄生部位に薬液が届くようにていねいに散布する。

【ネギ（シロネギ）】

<生育の概況>

生育は平年より遅れている。

●さび病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、0.4%と発生をわずかに認めた（平年発病株率0.02%）。本病は、例年11月以降発生が増加する（11月の平年発病株率1.3%）。
- ・本病は多湿を好み、発病適温は15～20℃である。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を助長する。

防除対策

- ・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。
- ・発病がみられたほ場では早期に薬剤防除を行うとともに、被害茎葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外で土中深くに埋めるなどして適切に処分する。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、上位3葉の平均発病株率は3.4%（平年6.9%）と平年より少なかった。ただし、9月までは発病が多かったこと（平均発病株率9.6%、平年4.2%）、及び10月はハモグリバエが多発し葉が枯死してしまっている場合が多かったことから、見かけ上の平均発病株率が低くなっているだけで、実際には病原菌が枯死葉上で生存しているものと推察される。したがって、11月以降でも多湿条件になれば、枯死葉上で孢子を形成・飛散させ、新葉に感染し発病すると考えられる。
- ・黒斑病は多湿を好み、分生子の発芽適温は24～27℃である。また、葉枯病の多発気温は15～20℃である。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を助長する。

防除対策

- ・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。
- ・曇雨天が続く場合には発病する前に予防散布を実施する。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率0.6%（平年1.8%）と、平年より少なかった。
- ・10月上中旬のフェロモントラップによる農林技術研究所内での成虫誘殺数は、平年並～多く推移している。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・例年11月には発生が減少する。卵塊（数粒～数十粒の卵の塊で灰白色の毛に覆われている）や若齢幼虫を見つけた場合は、早急に除去する。被害が続くようであれば、早めに薬剤防除を実施する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.0%（平年39.7%）と、平年より非常に少なかった。また、被害度は1.5（平年28.7）と平年より低かった。防除員からの情報では、一部地域で発生がやや多い状況である。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いものの、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・多発ほ場では、早めに薬剤防除を実施する。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均被害株率は62.8%（平年34.7%）と、平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・例年、気温の低下に伴って11月には発生が減少するが、多発生ほ場では複数回にわたり薬剤防除を実施する。薬剤の選択については、静岡県病害虫防除基準（URL：<http://www.s-boujo.jp>）を参照する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育は早い地域もあるが、台風被害によりやや遅れている地域もある。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（本病は比較的低温で、多湿の条件を好む）。
- ・例年、生育後半になると発生が増加するが、今年は台風19号の影響により傷が生じているほ場がみられた。そのようなほ場では、例年より早い時期から病原細菌が感染し、発生が増大する可能性がある。

防除対策

- ・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に速やかに防除を行う。
- ・降雨が続くときや初発生を確認した場合、速やかに薬剤防除を実施する。
- ・本病は主に結球期以降に発生するが、結球前も葉面の病原細菌数を減らしておく必要があるため、結球期に入る前に薬剤の予防散布をすることが大切である。

●べと病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生をやや助長する（多湿は本病の発生を助長する。また、病原菌の生育適温は10～15℃で比較的低温を好む）。

防除対策

- ・予防散布に努める。初発生を確認した場合は、速やかに薬剤防除を実施する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率0.1%）。
- ・フェロモントラップの誘殺数は、平年よりやや少なく推移している。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・例年、11月末まで幼虫が発生するので、ほ場での発生に注意し、防除効果の高い若齢幼虫期の防除に努める。なお、育苗期後半または定植時に薬剤処理した場合でも、定植1か月以降に幼虫が発生する場合もある。

【イチゴ】

<生育の概況>

生育は、全体的には平年よりやや遅れているが、地域によってかなりばらつきがある。

なお、10月の巡回調査は、台風19号被害のあった東部地域を中止したことから、調査結果の県平均値は、中部・西部地域における巡回調査データから算出した（平年値も同様）。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・10月下旬の巡回調査では、平均発病株率は4.7%（平年1.9%）と平年より多く、中部地域で多発生であった。
- ・本病は20℃前後の気温で発生しやすい。1か月予報では、気温は平年より高いため発生を助長する。

防除対策

- ・育苗期に発生がみられたほ場では今後の発生に注意し、発病が少しでもみられた場合は早急に防除する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・10月下旬の巡回調査では、平均発病株率は1.8%（平年1.1%）と平年よりやや多い発生であった。
- ・台風19号の暴風雨、冠水により、本病の感染が拡大した可能性がある。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため発生を助長する。

防除対策

- ・本病は高温多湿条件で多発する。ビニール被覆後はハウス内の温度が上昇し、発病を助長するので、ハウス内温度の過度な上昇をさける。また、開花・結実により株への負担がかかると発病しやすい。
- ・ほ場の見回りを徹底し、発病株や発病が疑われる株を見つけたら、直ちに培地（培土）も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて処分する。
- ・育苗中に本病が発生したほ場、台風による被害のあったほ場では、注意を怠らない。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・10月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は7.3%（平年2.5%）と平年より多い発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ビニール被覆後は、増殖に好適な条件となるので、発生に注意し初期防除に努める。
- ・天敵を利用する場合は、寄生されたアブラムシ（マミー）の発生状況をよく観察する。薬剤散布をするときは、天敵に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・10月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は9.0%（平年14.3%）で平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・近年では多発することが多いため、寄生が認められた場合は少発生のうちに防除を徹底する。
- ・天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ）を利用する場合は、ハダニ類の発生状況をよく観察し、発生が多い場合には、天敵放飼前にハダニ類の密度を下げる。ハダニ類が増えた時は、天敵に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.3%（平年0.7%）で平年より少ない発生であった。フェロモントラップによる誘殺数は平年よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・11月は野外の気温が下がり、外からの侵入は10月に比べ少なくなるが、11月中はまだ侵入が見られる。発生初期の若齢幼虫期に防除を徹底する。

【作物全般】

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・フェロモントラップの誘殺数は平年より多く推移している。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。
- ・例年、11月中は成虫が発生するため、施設開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。
- ・本種は中齢以降では薬剤の効果が劣るので、ほ場内での発生に注意し、若齢幼虫の防除に努める。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和元年10月24日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 10月26日から11月25日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率50%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	20	30	50
1か月	降水量	30	30	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	20	30	50
3～4週目	気温	30	40	30

【予報の対象期間】

- 1か月 : 10月26日(土)～11月25日(月)
1週目 : 10月26日(土)～11月1日(金)
2週目 : 11月2日(土)～11月8日(金)
3～4週目 : 11月9日(土)～11月22日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
URL <http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>